

鶴見大学 文学部 授業評価アンケート報告書
平成 19～24 年度調査結果

鶴見大学文学部 FD 委員会
平成 26 年 3 月

その一歩先へ ― 報告書刊行によせて ―

鶴見大学文学部では、平成16年度より授業評価アンケートを実施しております。その前段階として、平成13年度にまず「授業改善のためのアンケート実施委員会」を設置し、多岐にわたる問題点を洗い出して討議を重ね、各教員独自の工夫による個別アンケートを試行、結果を分析し公表しました。これらの実績と経験とをふまえ、現在の質問項目・実施方法採用に至っております。勿論今後も、アンケートを内容・形式・実施方法等の面で不断に点検し、授業改善に有意義なものとしなければなりません。この報告書は、理想からはまだ遠いかもかもしれませんが、平成19年度より24年度に至る5年間のアンケートに基づき、調査・分析結果を公刊するものです。

なお、共通科目・専門科目・資格課程科目の全ての授業に対し、専任・非常勤の別なくアンケートは厳正に実施されています。そして授業ごとの分析結果はこれを各教員に戻し、次年度以降の授業内容・教授法・事前事後の指導・授業環境設定等において、有効適切な改善を行うための基礎資料としております。当報告書は、教員一人一人に戻された各授業の分析結果を単純に総計したものではなく、それらを補完する意味で、大局的に文学部全体を俯瞰した調査結果報告です。また日本文学科・英語英米文学科・文化財学科・ドキュメンテーション学科のFD委員と共通教育運営委員会・資格課程運営委員会による分析・コメントも付加いたしました。

教員の誰もが、真摯かつ謙虚に学生の声を聞き、一層の授業改善に取り組む必要があります。それによって学生の満足度を上げ、社会的期待に応えるのが大学の責務だからです。授業評価アンケート自体は、疑いもなく改善のための重要な要素ですが、わたしたちは常にその一歩先へ進まなくてはなりません。そしてアンケートでは問われていなくとも、忘れることの出来ないことがらがあります。最新の教育機器を使いこなし、流行の教育理論に則り、巧みな語りで受講生に接し、今日的な話題によって関心を引くとしても、教える側が最高学府の講義に必須の深い学識や鋭い問題意識、もしくは幅広い知見を持たなければ、つまり研究者としての圧倒的な実力を欠いていたのでは、小手先の技術で何ができるでしょうか。学問をする者の資質と姿勢は、大学人の誇りであり大学の財産だと考えます。それらを根底として授業の改善を進めることが、頑愚なわたくしの願いです。

お気づきの点がございましたら、どうぞご意見をお聞かせ下さい。今後一層のご理解・ご指導を、伏してお願い申し上げます。

平成26年3月1日
文学部長 高田信敬

目 次

I. アンケート結果の分析

1) 授業に関する意欲

1-1 授業に対する意欲	4
1-2 授業への意欲的な参加	6
1-3 予習・復習	8

2) 教員の熱意・相互性

2-1 教員の熱意	10
2-2 質問のしやすさ	12

3) 教員の教授法

3-1 話し方・説明の仕方	14
3-2 板書・資料の提示法	16
3-3 進行速度・内容・分量	18

4) 授業の成果・満足度

4-1 授業の理解度	20
4-2 授業の満足度	22
4-3 授業に対する興味度	24

5) その他

5-1 履修理由	26
5-2 受講者数	28

II. 調査結果を受けて —共通科目・資格課程および各科—

日本文学科	32
英語英米文学科	32
文化財学科	33
ドキュメンテーション学科	33
共通科目	34
資格課程	34

III. 設問一覧

授業評価アンケート用紙	36
設問 14 履修学年	37

IV. まとめ	39
---------	----

I. アンケート結果の分析

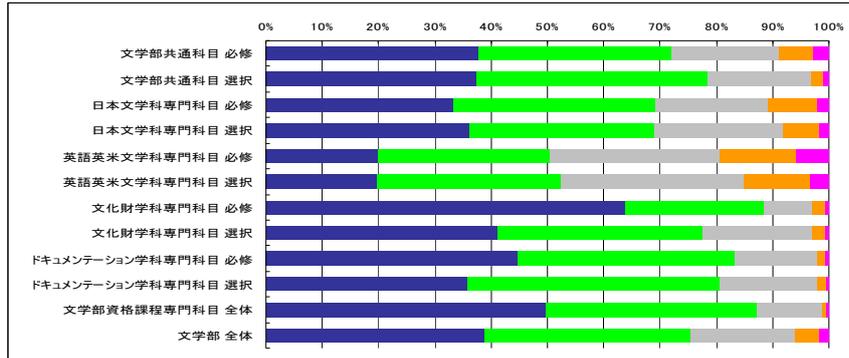
1) 授業に対する意欲

1-1 授業の出席状況

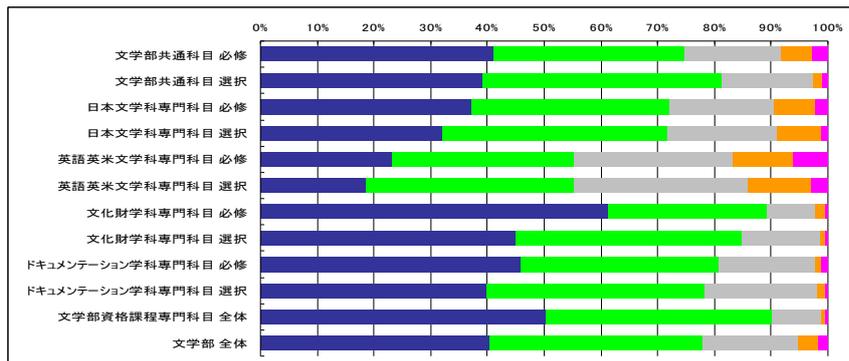
【設問2】 あなたはこの授業をどの程度欠席しましたか？



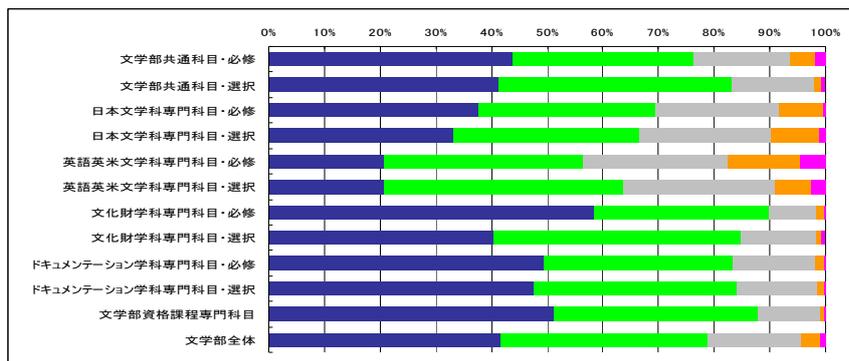
平成 19 年度



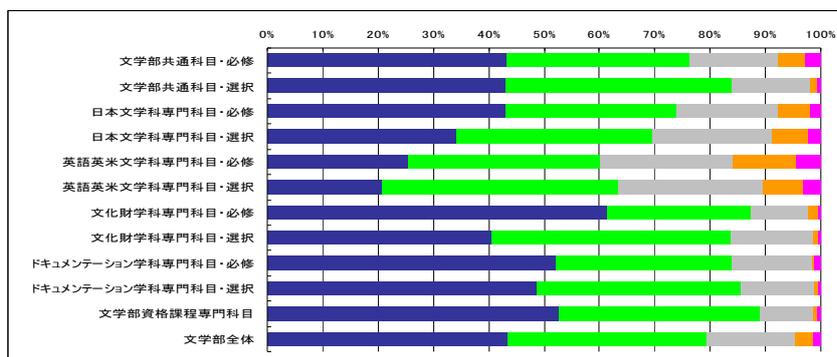
平成 20 年度



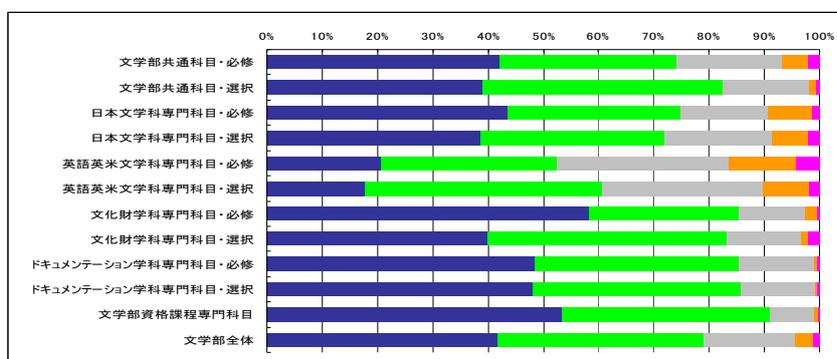
平成 21 年度



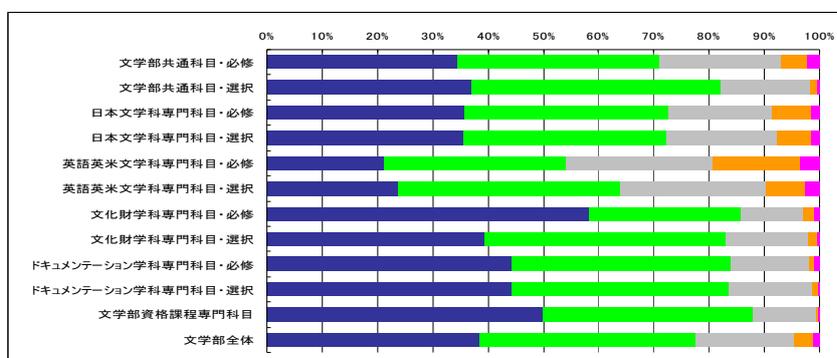
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

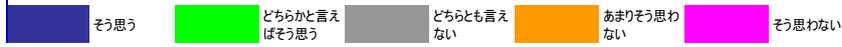


総じて、「欠席0回」「欠席1~2回」という回答をあわせると8割近くになり、平成18年度までは7割程度であったことから出席率は良好であるといえよう。出席率は年度によらず、学科や必修・選択の別による差が大きく、必修科目の方が出席状況はよい。

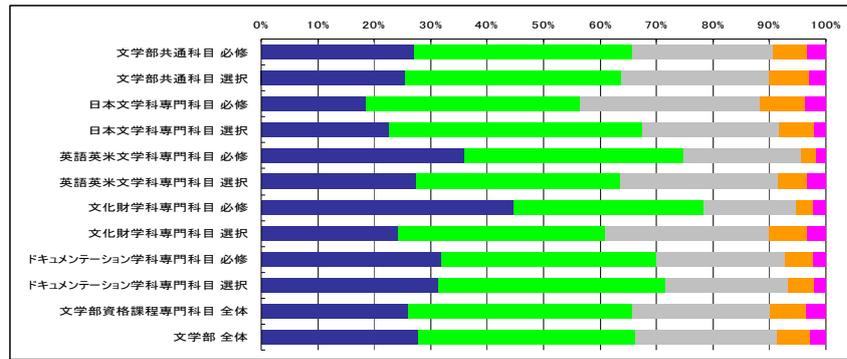
文化財学科の必修科目においては、「欠席0」が60%前後と皆勤率が高い一方、英語英米文学科では、必修・選択科目とも「欠席0」は20%前後であり、欠席の割合が高い。他の学科は、その中間に位置する。実習科目が多い学科の方が比較的出席率が高いようである。

1-2 授業への意欲的な参加

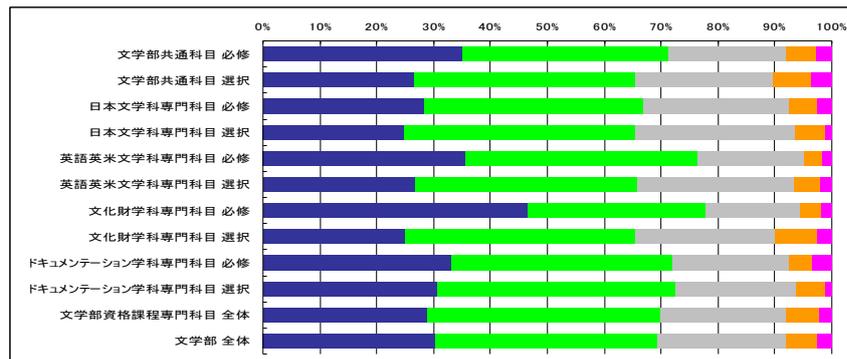
[設問3] あなたはこの授業に対して意欲的に参加しましたか？



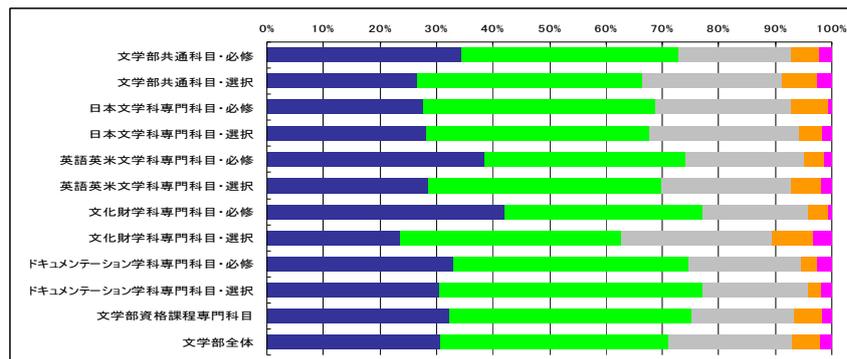
平成 19 年度



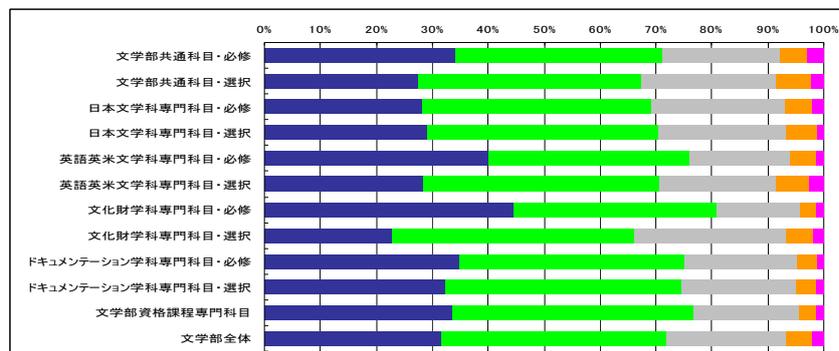
平成 20 年度



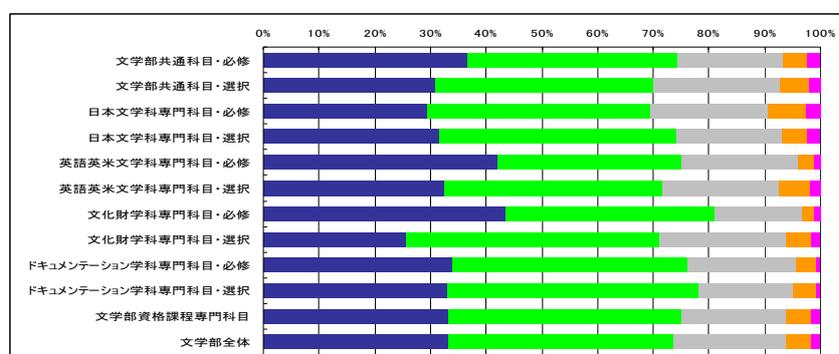
平成 21 年度



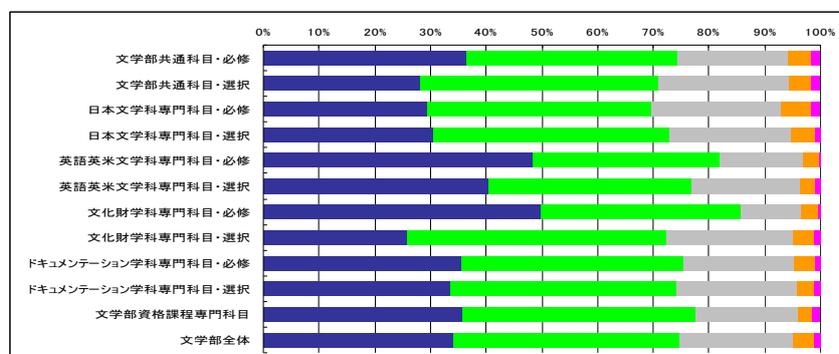
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

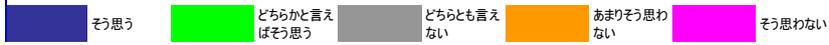


授業に意欲的に参加したかという問いに対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答を足すと平成 17 年度は 6 割程度であったが、平成 24 年度は 7 割以上となり、全体的に授業に対して積極的な関与が年度を追うごとに高まっている。

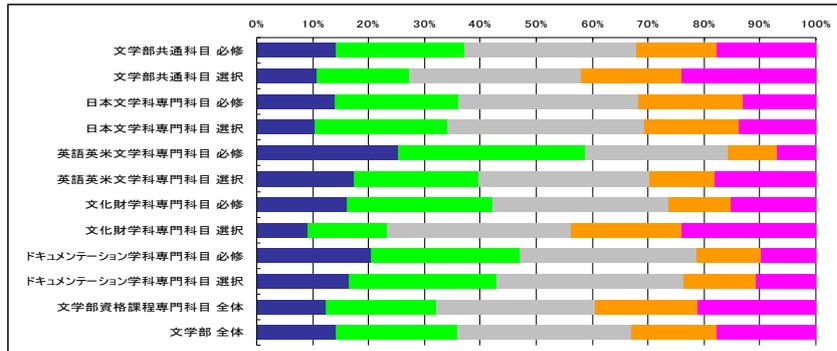
特に、英語英米文学科の必修科目と文化財学科の必修科目は 8 割以上で最も意欲的に取り組んでいる。前回のアンケート報告書と比較したところ、文化財学科とドキュメンテーション学科の必修科目において意欲の高さが指摘できる。そして、英語英米文学科の学生の意欲度が高まっている。

1-3 予習・復習

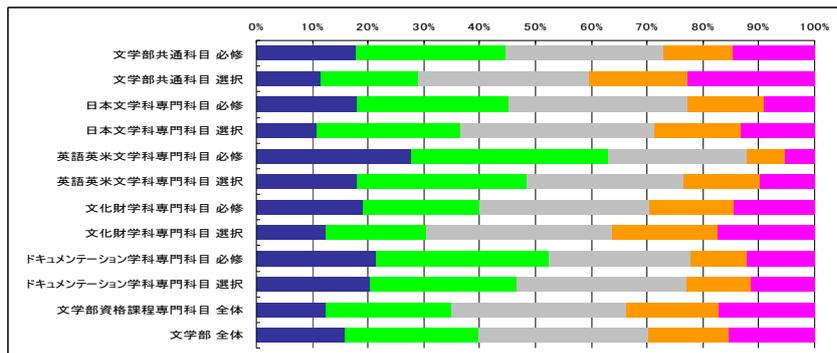
[設問4] あなたはこの授業に対して予習・復習など授業外の学習をしましたか？



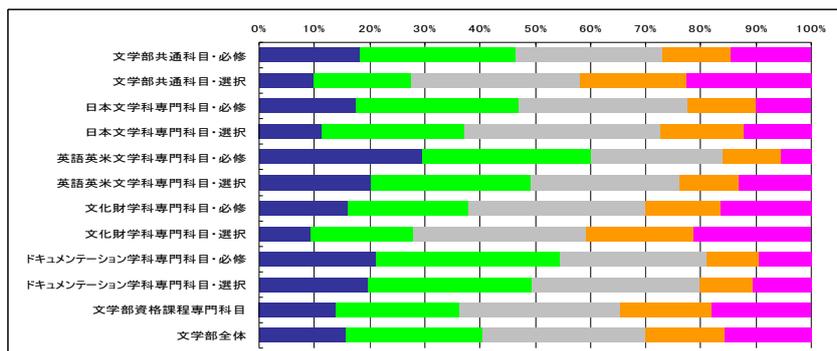
平成 19 年度



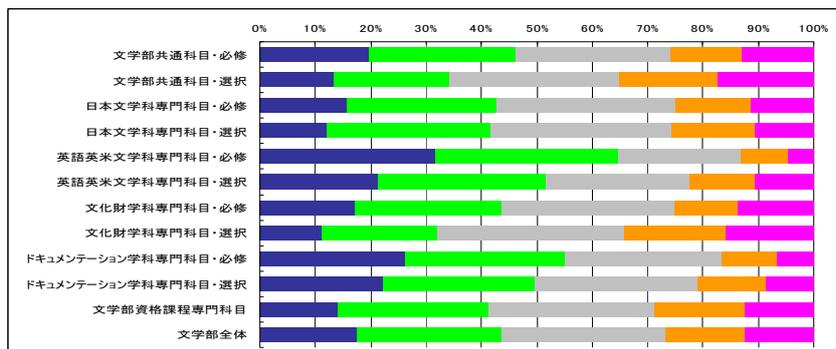
平成 20 年度



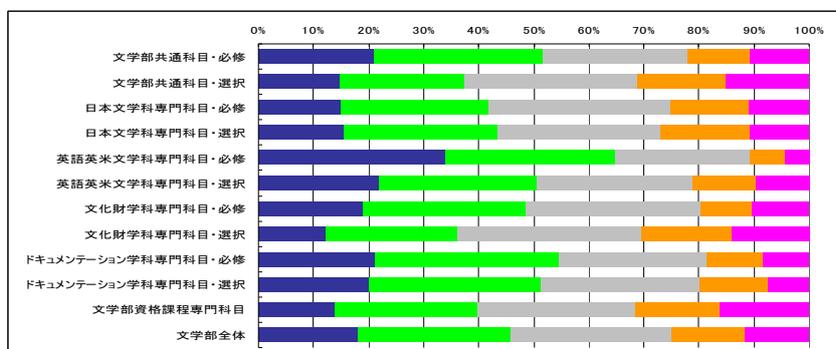
平成 21 年度



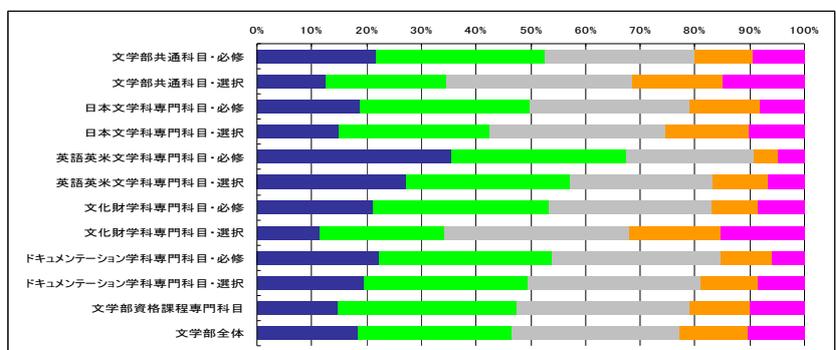
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



この設問では授業内容によって大きくばらつきがあるものの、全体としてみると予習・復習などの授業外の学習をする割合が増加傾向にある。専門科目を履修していくに従って、予習・復習の必要性を体感しているのであろう。しかし、授業外の学習をする学生としない学生の二極化が生じていることも指摘できよう。

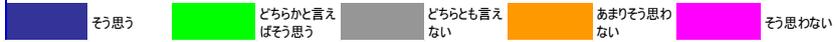
英語英米文学科とドキュメンテーション学科において授業外の学習する割合が高い。これは語学や技術などを習得するために、授業外の学習をする機会が多いためであろう。

一方、共通科目においては授業外学習をする学生が少ない。前回のアンケート報告書でも指摘されているように、講義科目が多く、授業中に個人的な評価を受ける機会が少ないため、授業外の学習への動機付けが低いであろう。

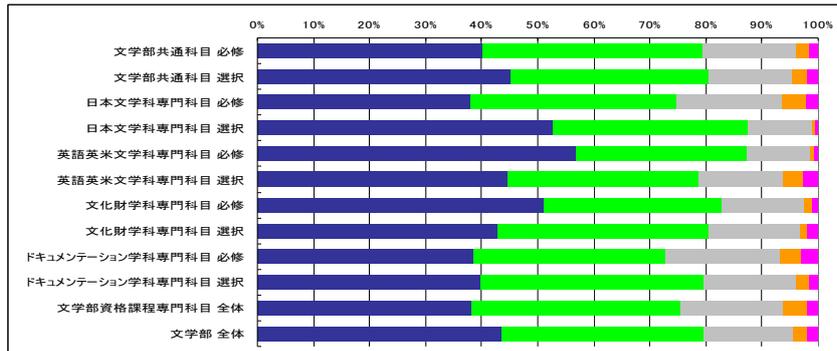
2) 教員の熱意・相互性

2-1 教員の熱意

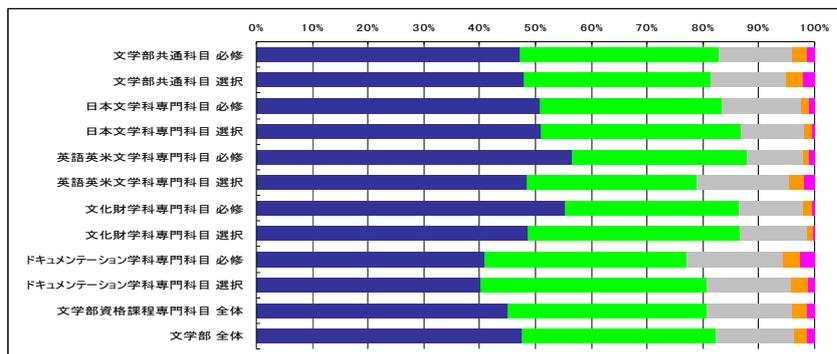
【設問5】 教員に授業に対する熱意が感じられましたか？



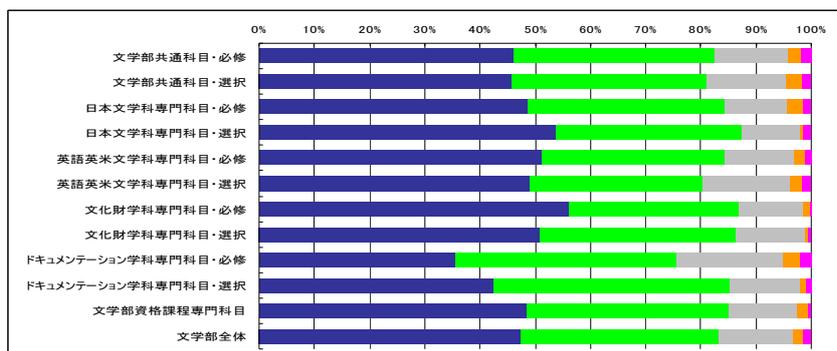
平成 19 年度



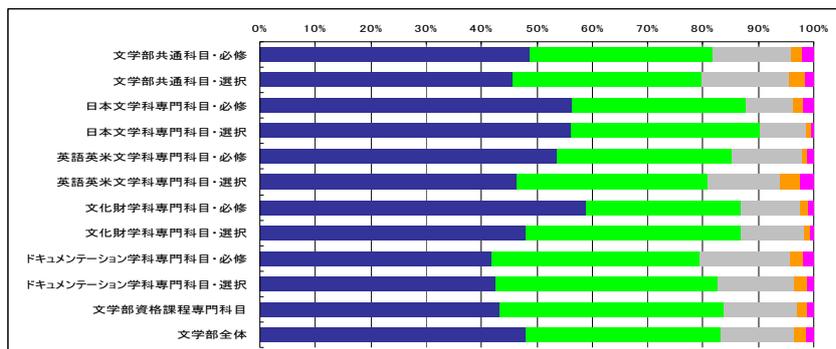
平成 20 年度



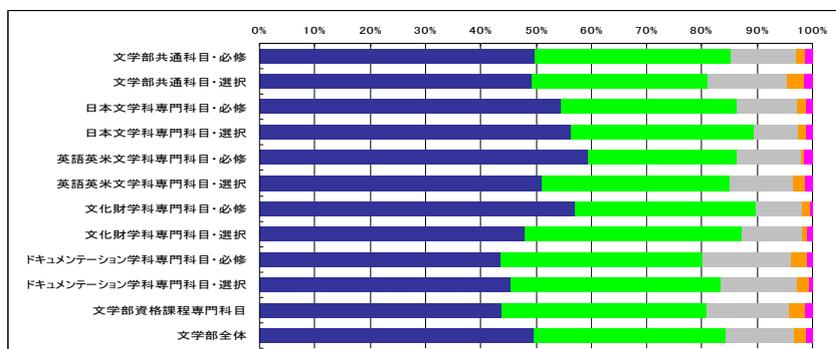
平成 21 年度



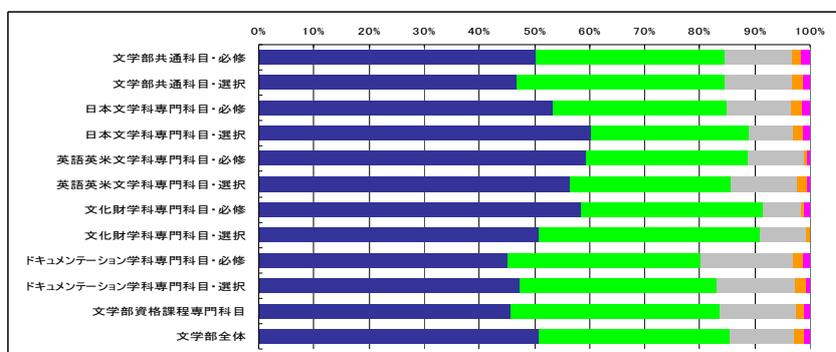
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

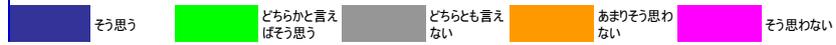


「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答を足すと、平成 19 年度で 80%弱、その後徐々に増加し、平成 24 年度では 85%程度に達しており、教員の熱意を感じる学生が増加していることが分かる。FD 活動や自己点検の活動の効果が徐々に現われているようである。

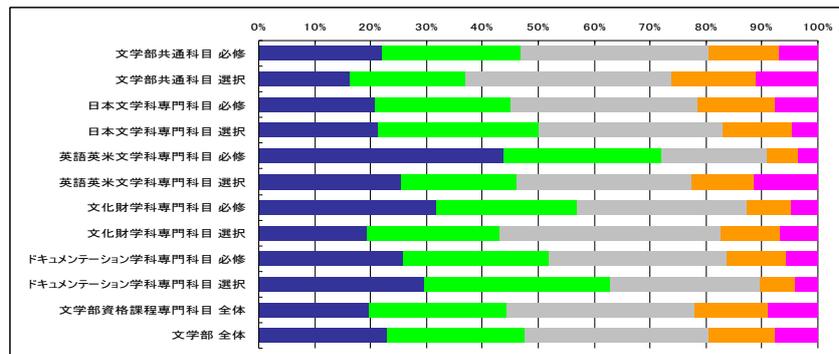
また、「あまりそう思わない」「そう思わない」という回答をしている学生も若干いるが、この評価をしている学生がきちんと出席し、課題をやっているかについても別途分析する必要を感じる。さらに、教員の授業に対する熱意を学生がどこから感じているのか不明であり、相関する出席率や学習意欲等に反映していないともいえないので、別途分析する必要性を感じる。

2-2 質問のしやすさ

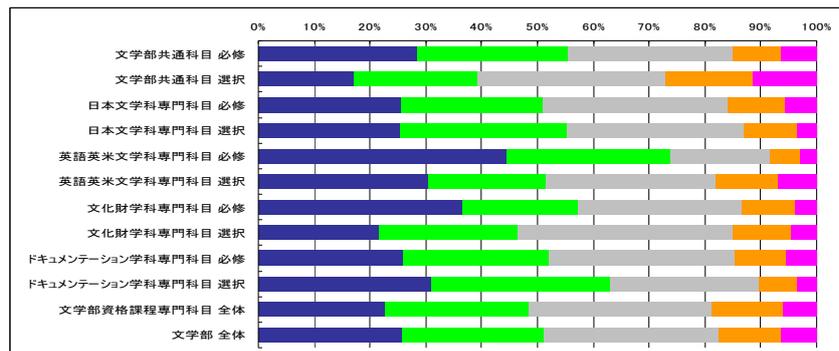
[設問9] 質問や意見が言いやすい授業でしたか？



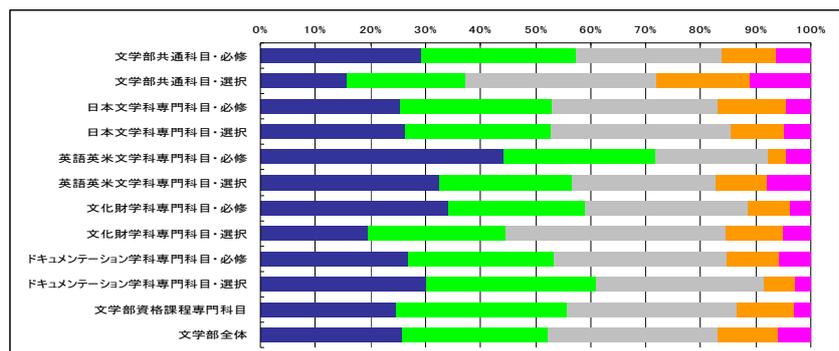
平成 19 年度



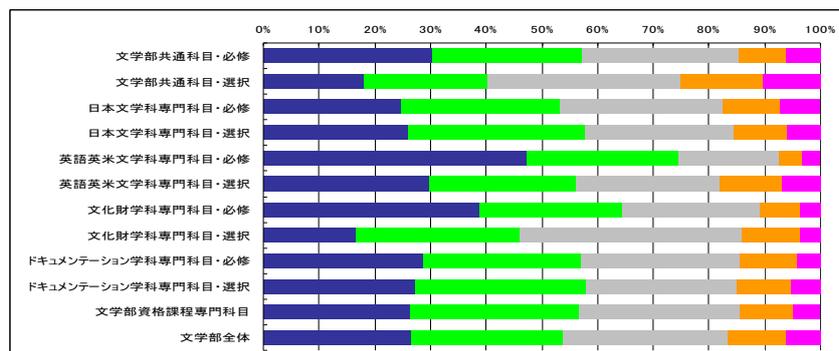
平成 20 年度



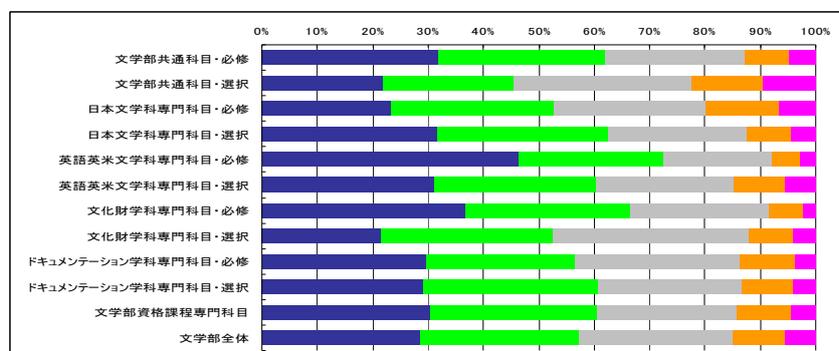
平成 21 年度



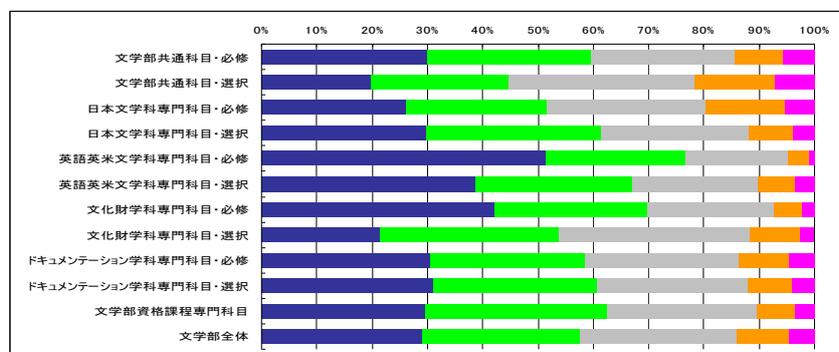
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



全体的に見ると、どの学科・科目においても「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答が増加しており、調査期間中の6年間に10%程度増えていることは評価に値するであろう。特に、英語英米文学科の必修科目履修生では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が7割を超え、教員と学生のコミュニケーションが取れている様子が伺える。

また、ドキュメンテーション学科も評価が高まっている。特に、選択科目では受講人数が少なく、教員との距離が近い分、質問や意見が言いやすいものと思われる。

一方、「あまりそう思わない」「そう思わない」という回答は、文学部共通科目の選択科目で高い割合である。概して、共通科目は受講人数が多く、質問や意見が言いにくい状況であるためと思われる。今後の改善が望まれる。

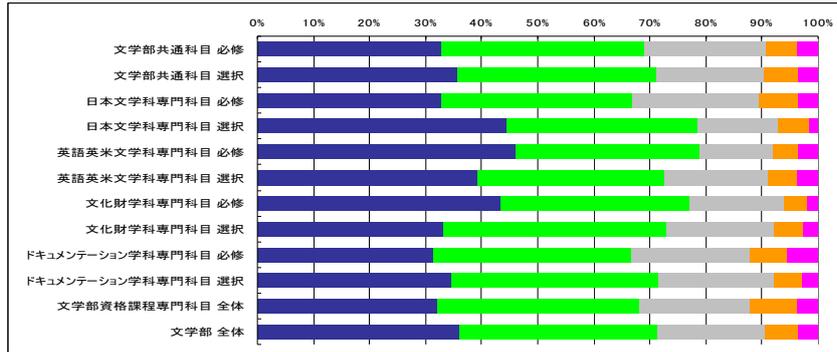
3) 教員の教授法

3-1 話し方・説明の仕方

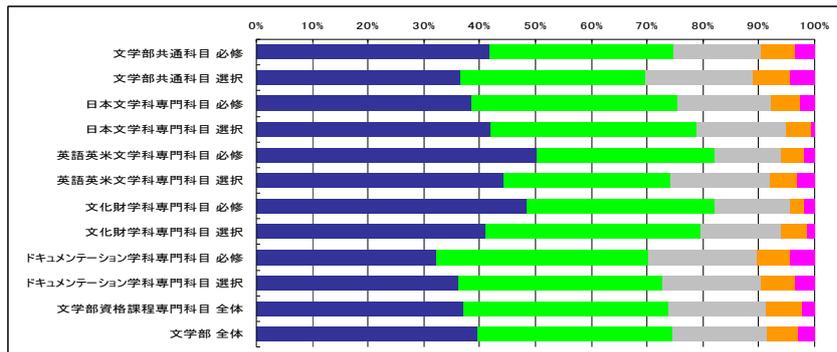
[設問6] 教員の話し方・説明の仕方は適切でしたか？



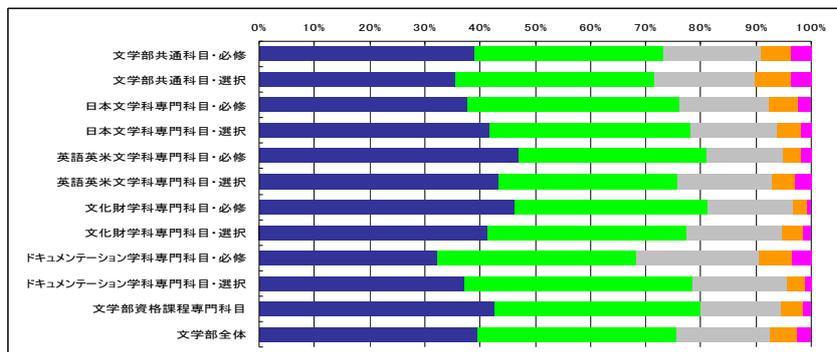
平成 19 年度



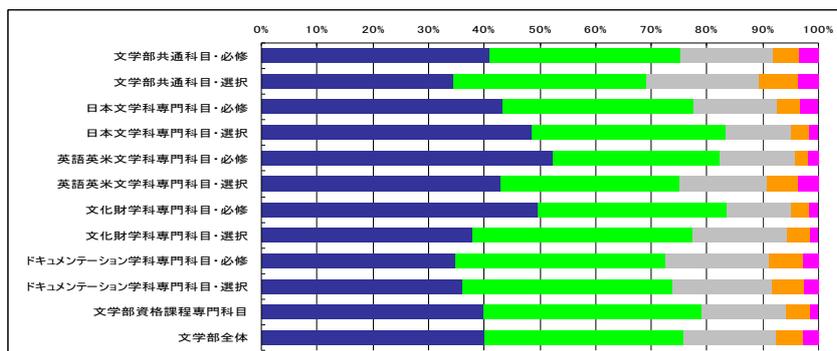
平成 20 年度



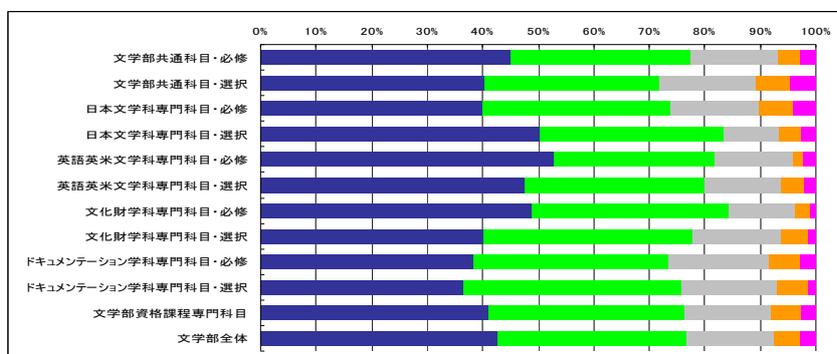
平成 21 年度



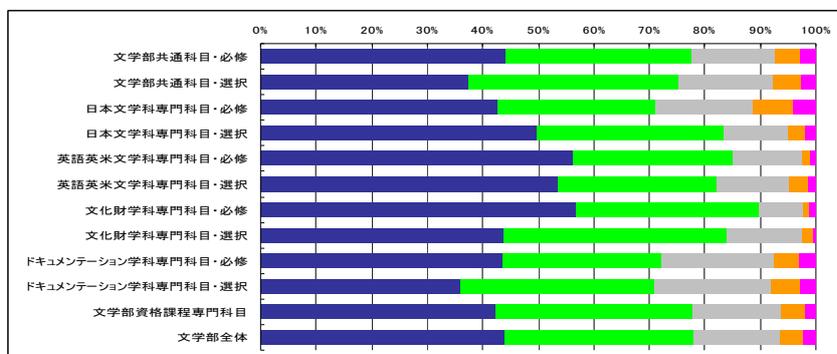
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

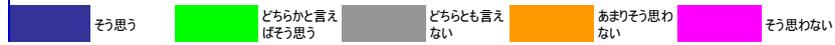


この設問に対しては、学科・教科による大きな差は見られず、概ね適切であると見なされているようである。経年的に、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答の平均が平成 19 年度では 70% 強であったが、徐々に増加し平成 24 年度では 80% に近づきつつあり、教員の努力が評価されていると思われる。

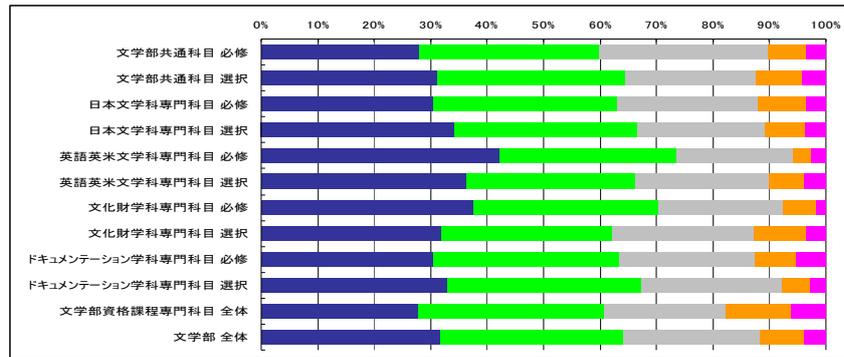
ドキュメンテーション学科に関しては、文学部全体の平均値以下で推移している。これは、授業内容の専門性により、学生が理解できないと判断したものを、教員に転嫁していることもあるかもしれない。学生側の理由によるものとも考えられるが、いずれにしても、教員は授業の質の向上を求め続ける必要がある。

3-2 板書・資料の提示法

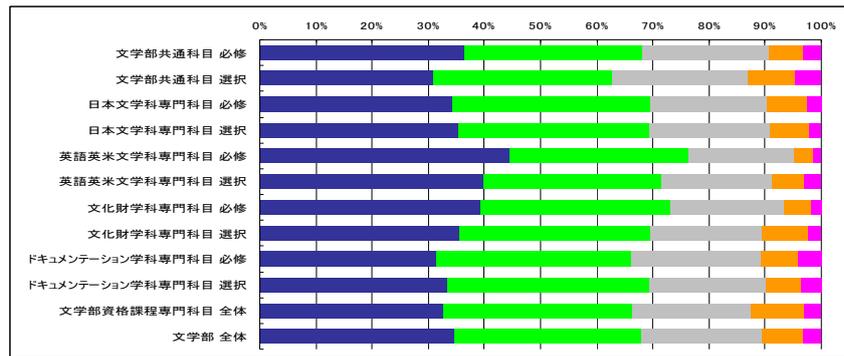
[設問7] 教員の板書や資料の示し方は適切でしたか？



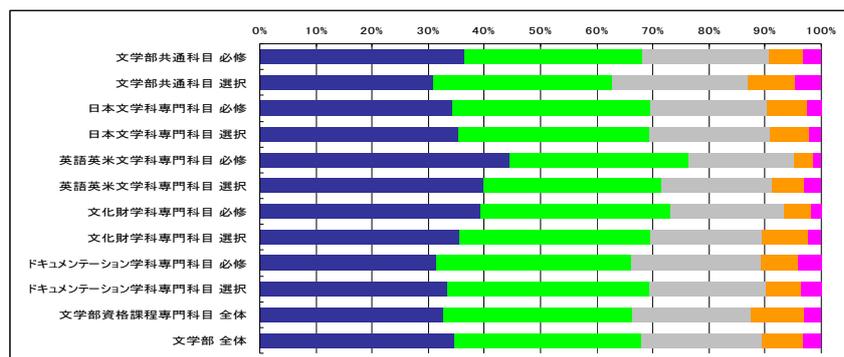
平成 19 年度



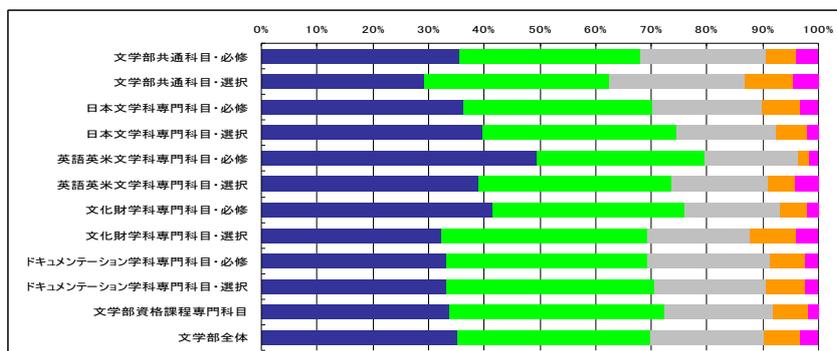
平成 20 年度



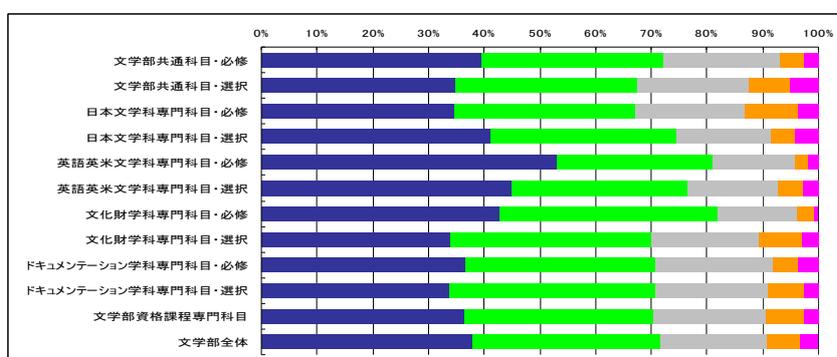
平成 21 年度



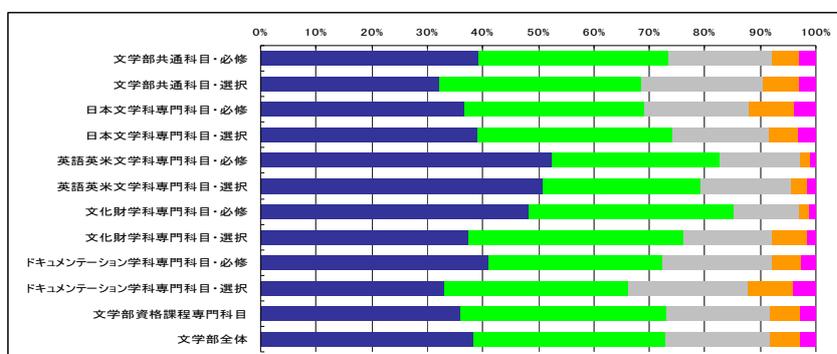
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



文学部全体では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答を合わせると、平成 19 年度は 64%程度から平成 24 年度には 73%程度に伸びており、板書など資料の提示の仕方に改善が見られる。英語英米文学専攻及び文化財学専攻の必修科目において多少良い結果を示しているものの、大きな差は見られない。

文学部資格課程専攻科目において、平成 19 年度では「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生がやや目立っていたが、平成 24 年度には半分程度に減少し、改善がなされたことが伺える。

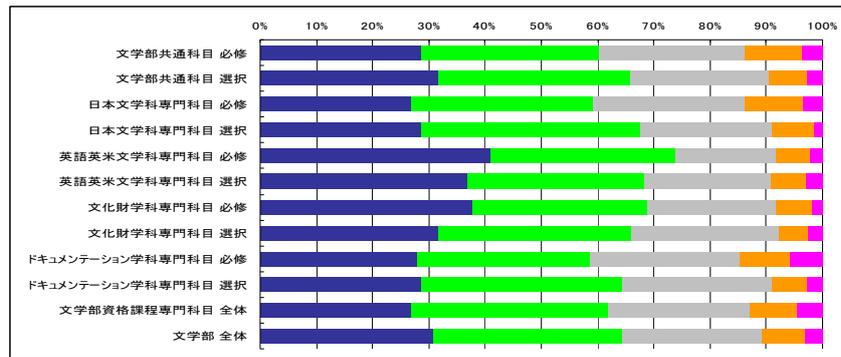
また、必修科目と選択科目を比較すると、必修科目の満足度が低い傾向にある。これは必修科目の受講生の人数が多く、板書などの資料の示し方が難しいためと考えられる。特に、板書に関しては、一年生などは大学の授業に不慣れであることを考慮した授業を教員側が心がける必要がある。

3-3 進行速度・内容・分量

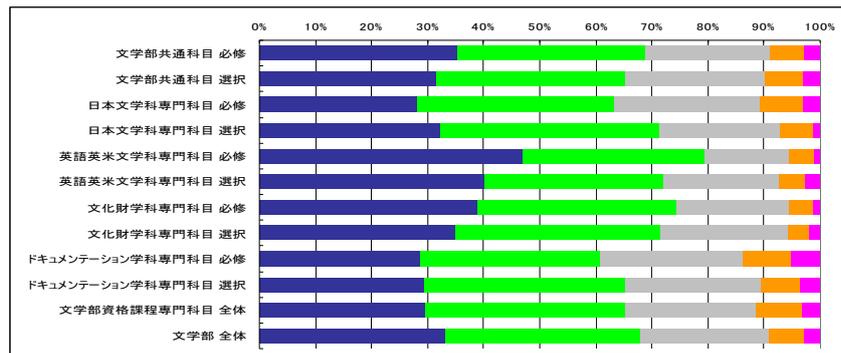
[設問8] この授業の進行速度や内容の分量は適切でしたか？



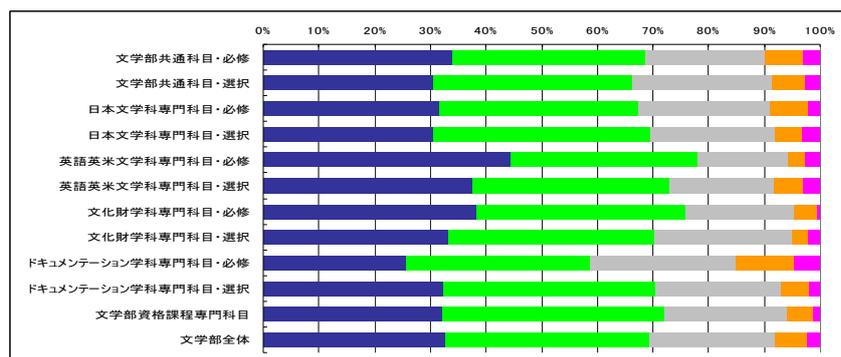
平成 19 年度



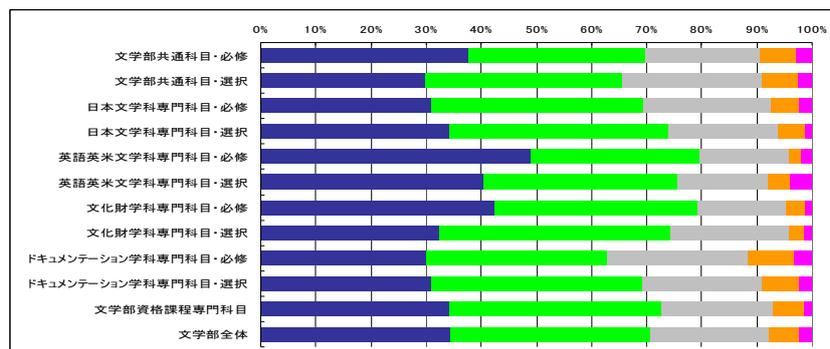
平成 20 年度



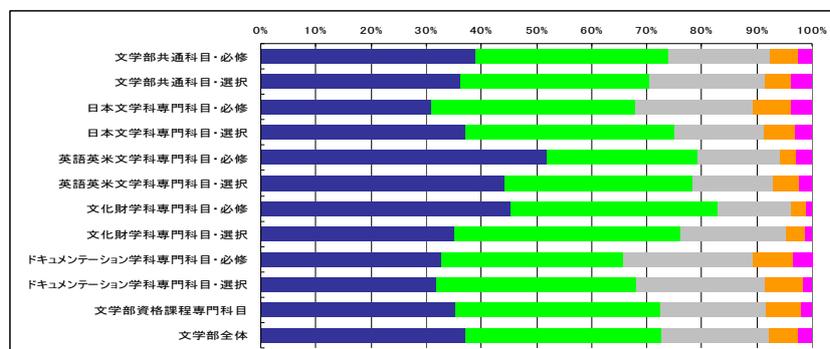
平成 21 年度



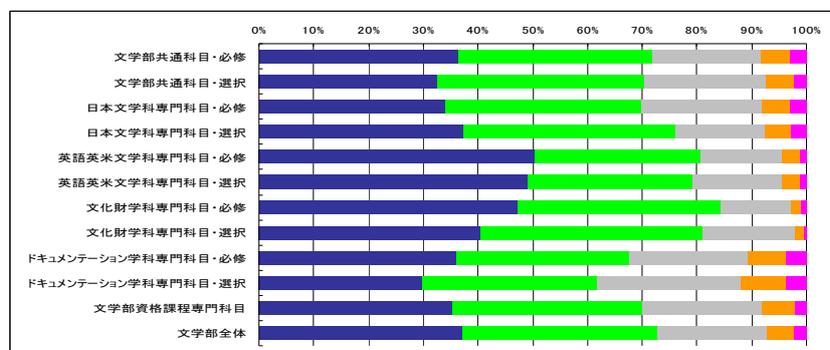
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



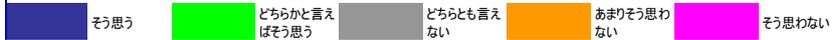
文学部全体では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答が64%から73%へ上がっていることから、学生の実態を把握し、改善していると思われる。

特に、文化財学科の必修科目において改善度が大きく、平成23年度以降、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせた回答が文学部の中で最も多い。日本文学科とドキュメンテーション学科では、必修より選択が、英語英米文学科と文化財学科では選択より必修の割合が高いことが指摘される。

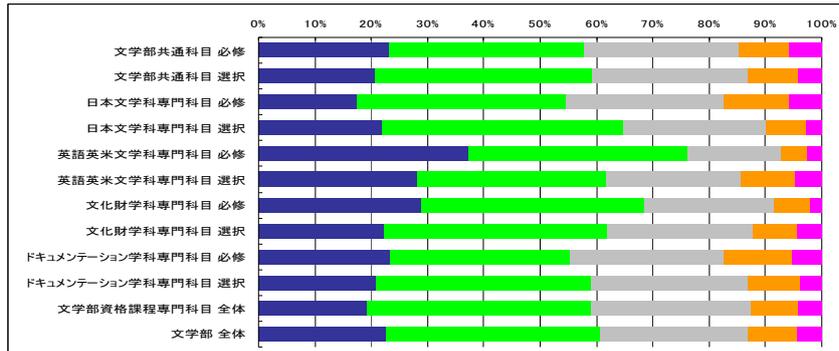
4) 授業の成果・満足度

4-1 授業の理解度

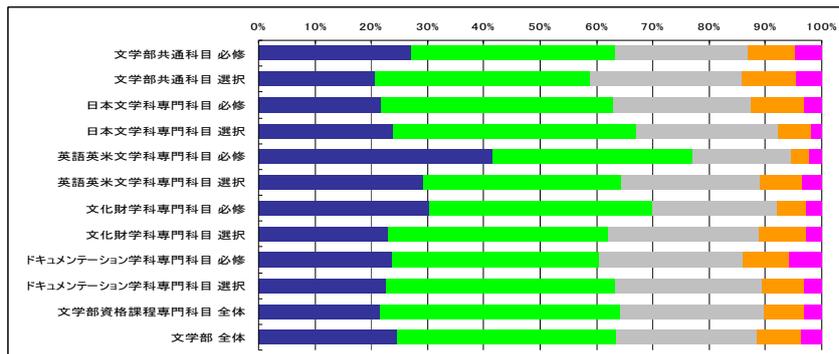
[設問10] あなたは授業内容を理解できましたか？



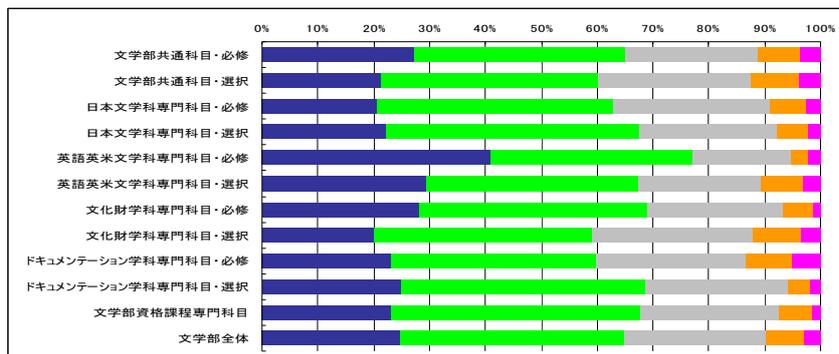
平成 19 年度



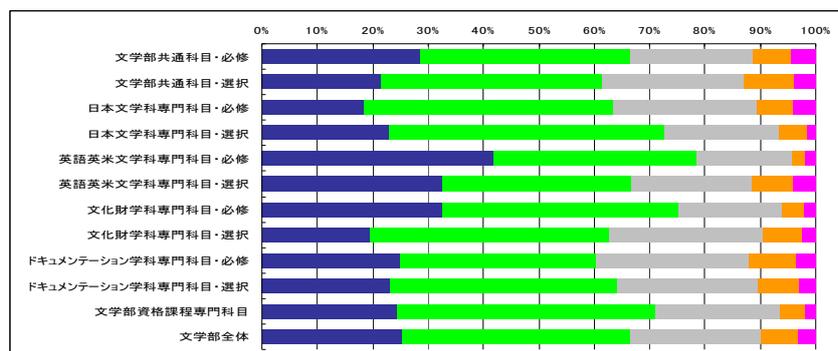
平成 20 年度



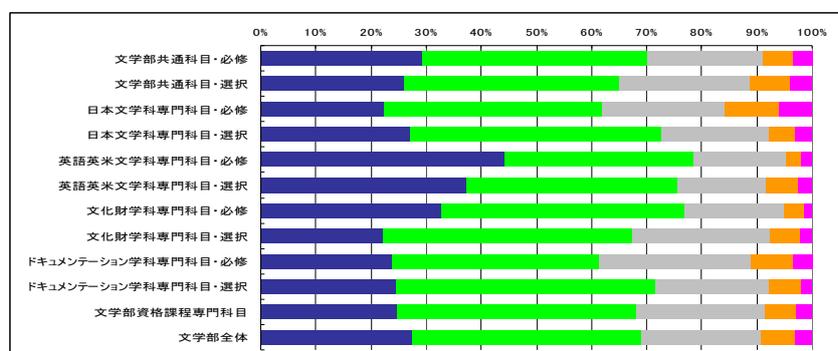
平成 21 年度



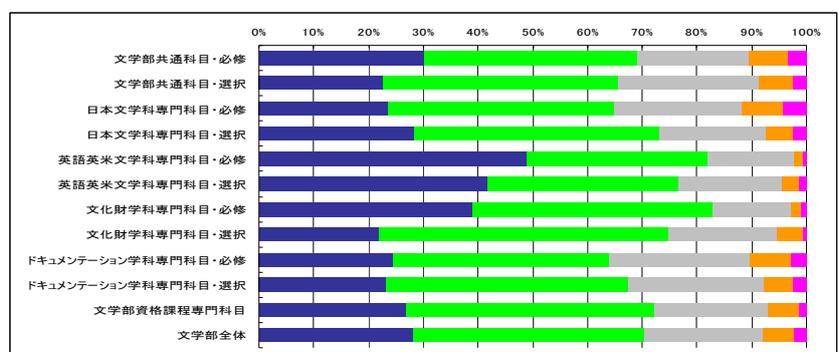
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

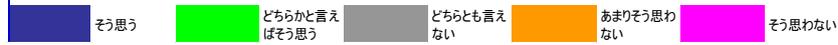


文学部全体では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答が 60%から 70%へと 10%程度増加しており、学生の実態に即した授業を行っていることが推察される。ただし、もしも理解度を上げるために授業進行速度を遅くし、内容の分量を減らしたというのが実態なら、必ずしも正しい解決方法とは思われない。この事に関しても別途分析する必要を感じる。

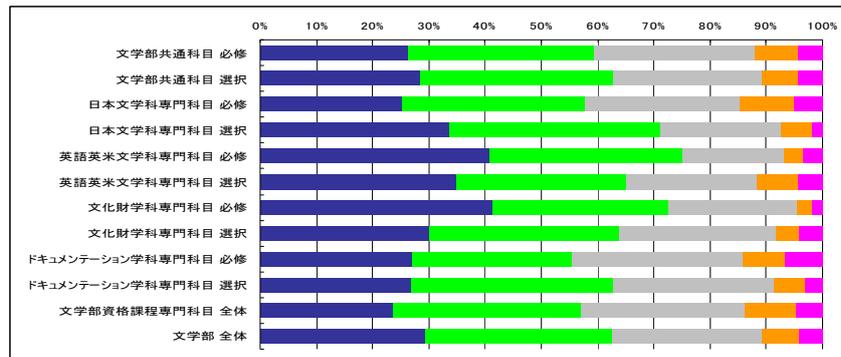
英語英米文学科の必修科目において、平成 19 年度から 21 年度の間では「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせた回答が突出していた。しかし、平成 22 年度以降は他の学科・科目においても理解度が高くなってきている。特に、文化財学専攻の必修科目では、平成 24 年度には最も割合が高くなっている。日本文学専攻とドキュメンテーション学専攻では、必修より選択が、英語英米文学専攻と文化財学専攻では選択より必修の割合が高い。特に、ドキュメンテーション学専攻では選択科目が多い上級生の理解度が高いことが読み取れる。

4-2 授業の満足度

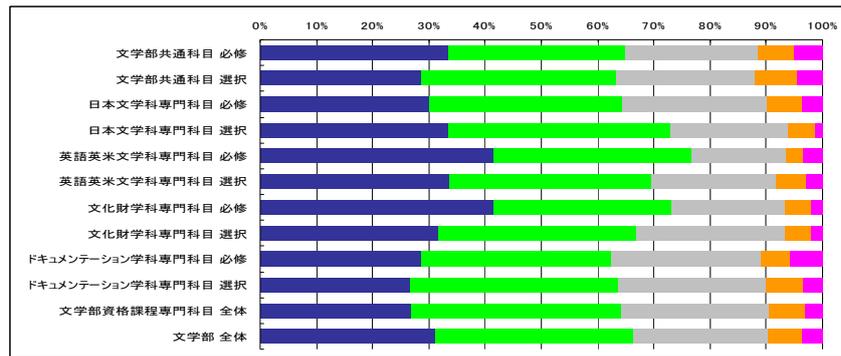
[設問11] あなたは授業内容に満足しましたか？



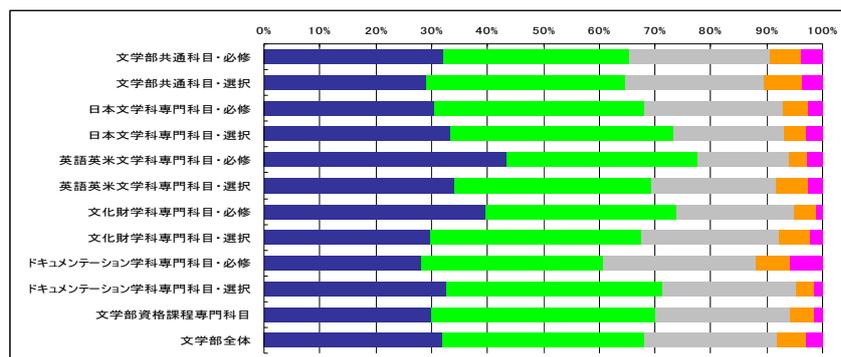
平成19年度



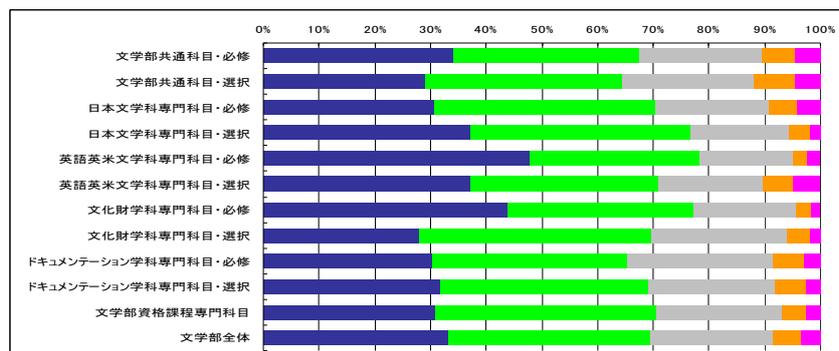
平成20年度



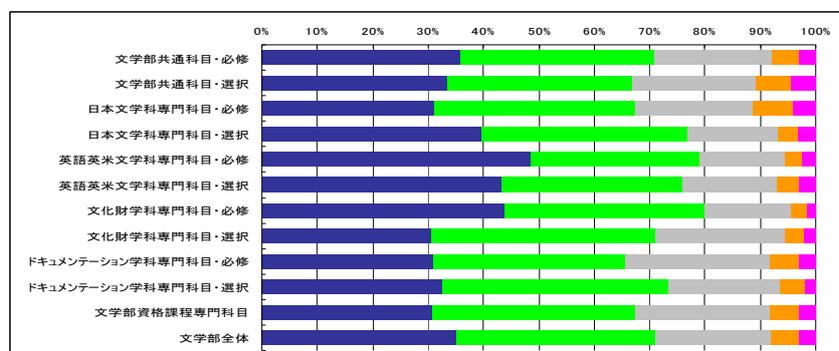
平成21年度



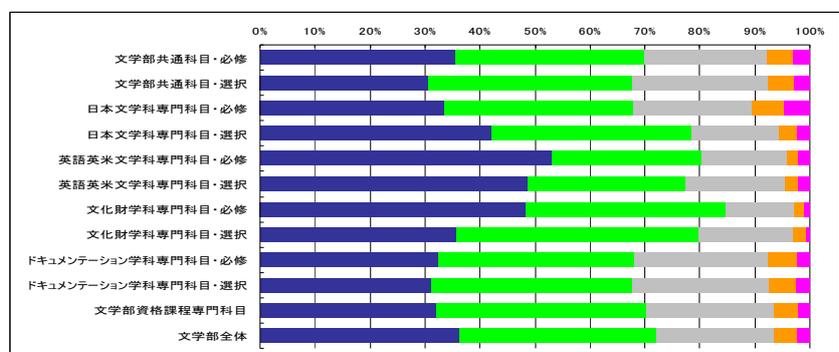
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度

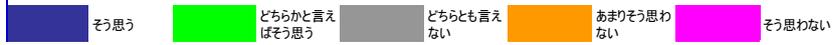


文学部全体を見ると、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答が 62%から 72%へと 10%程度増加しており、学生の満足度が高くなっている。特に、英語英米文学科と文化財学科の「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答している割合が高く、満足度が高い評価を受けており、教員の努力と指導の方向性が表れているといえよう。

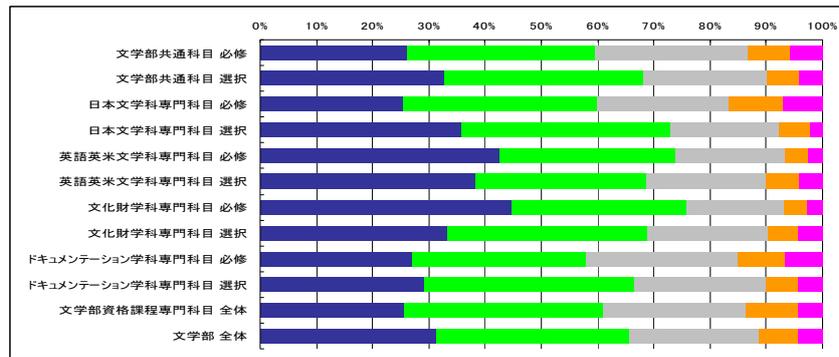
また、ドキュメンテーション学科の科目においては若干評価が低い傾向が見られるが、平成 19 年度から比較すると、確実に評価が上がって来ていることが分かる。

4-3 授業に対する興味度

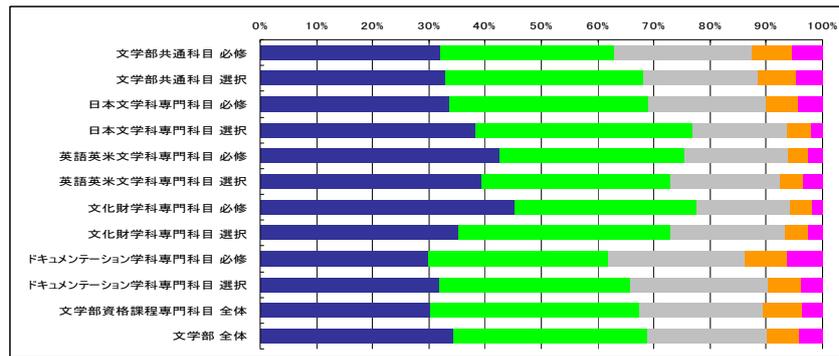
[設問12] あなたは授業内容に興味を持ちましたか？



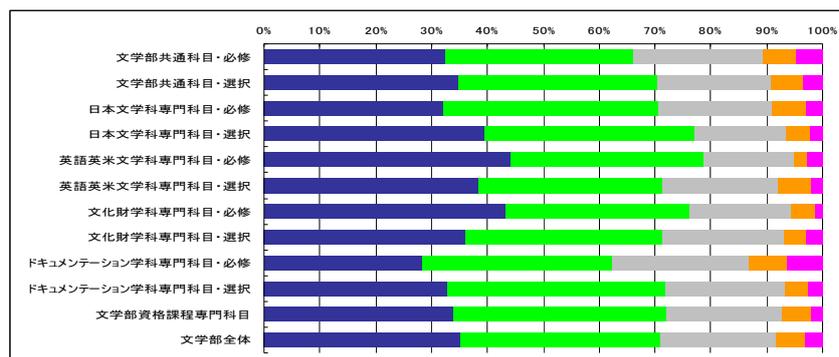
平成 19 年度



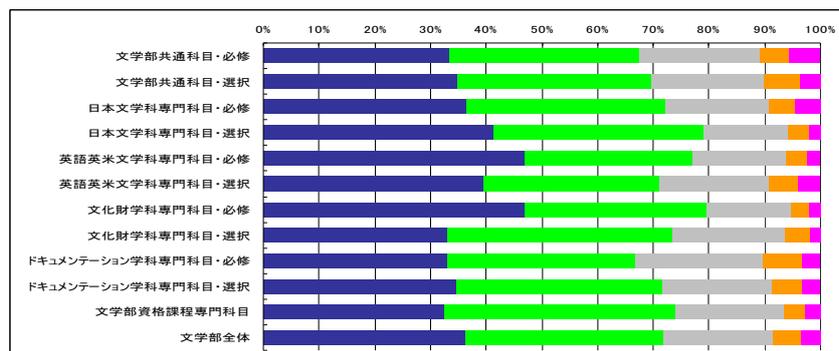
平成 20 年度



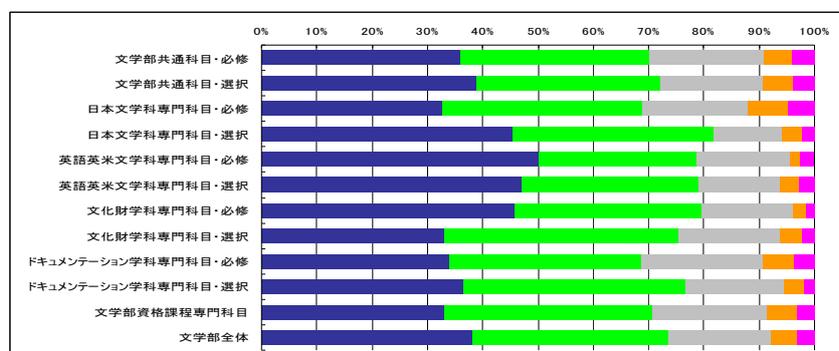
平成 21 年度



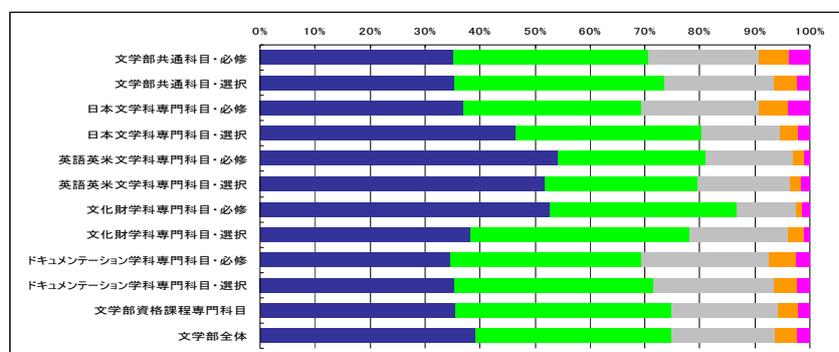
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



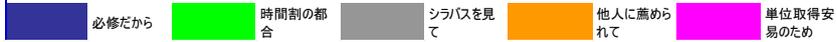
全体的にみると、平成 19 年度では「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせた回答が 65%程度であったのが、平成 24 年度には 10%程増加し、75%程度になっている。反対に、「あまりそう思わない」「そう思わない」が半分程度に減少していることから、学生がより興味を持てる授業内容になってきているようである。

特に、文化財学科の必修科目の満足度は非常に高く、平成 24 年度は 85%を超えている。これは、教員が常に興味を喚起していることと、実習科目が多いことによるものであろう。

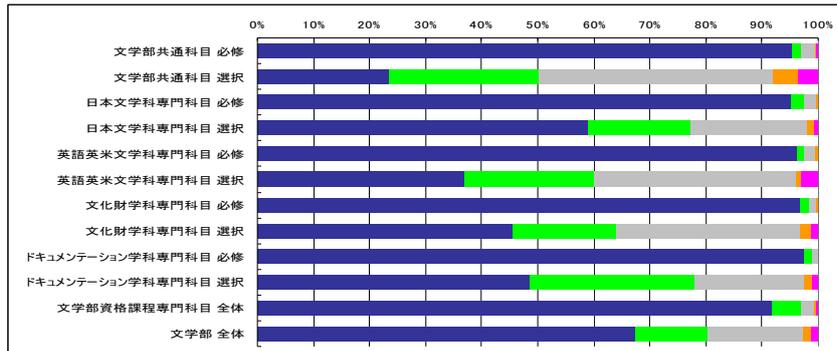
5) その他

5-1 履修理由

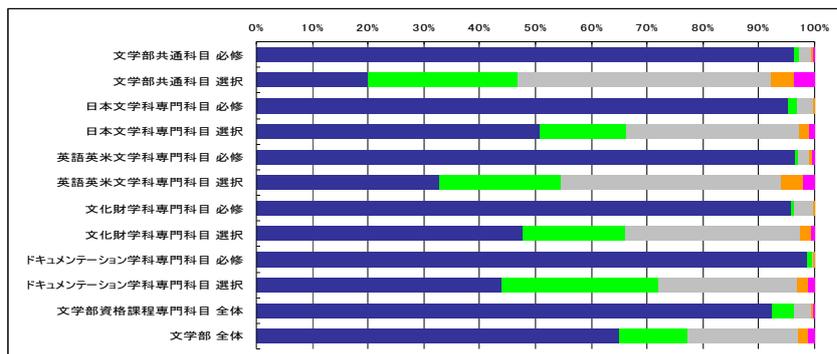
【設問1】あなたがこの授業を履修した一番の理由は何ですか？



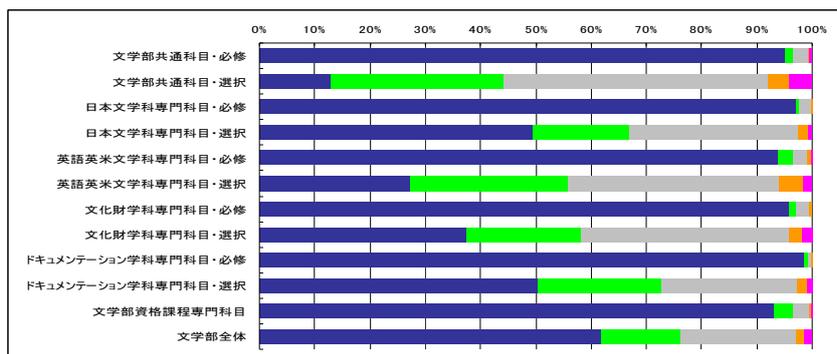
平成 19 年度



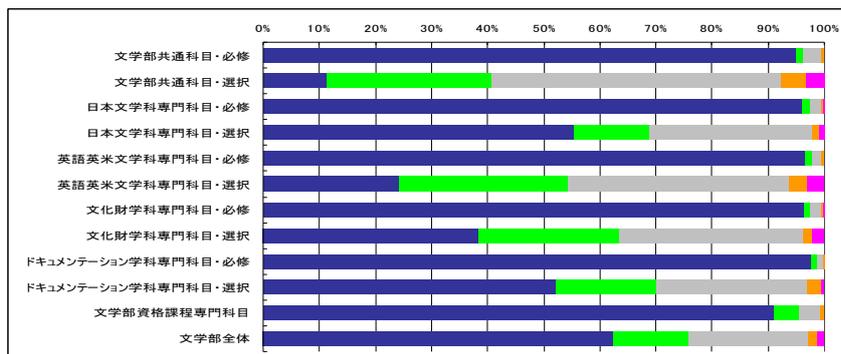
平成 20 年度



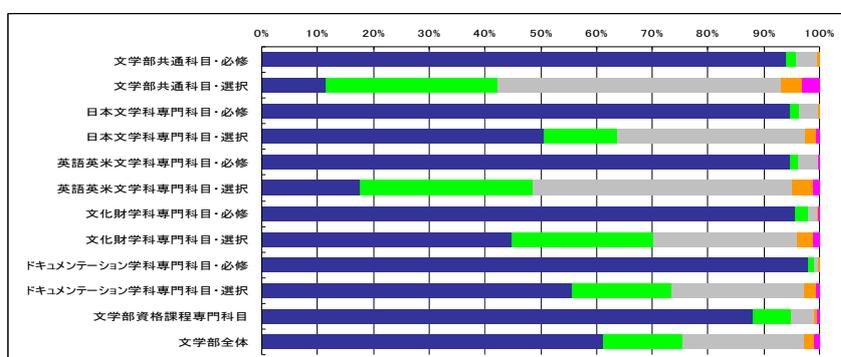
平成 21 年度



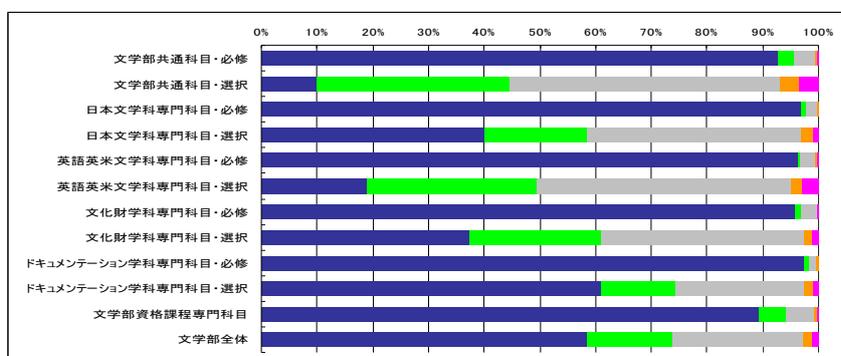
平成 22 年度



平成 23 年度



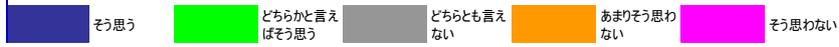
平成 24 年度



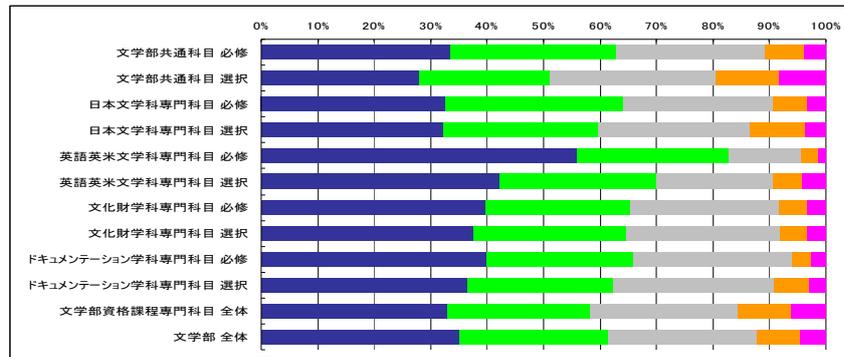
必修科目を「必修だから」履修しているのは当然であるが、選択教科を「シラバスを見て」履修している学生が平成 19 年度には 18%程度しかいなかったのに対し、平成 24 年度には 20 数%に上昇している。この数値から、自律的な履修をするようになった学生が増加していると思われる。「単位取得安易のため」という回答をしている学生はほとんどいなかったことも、この事を裏付けている。

5-2 受講者数

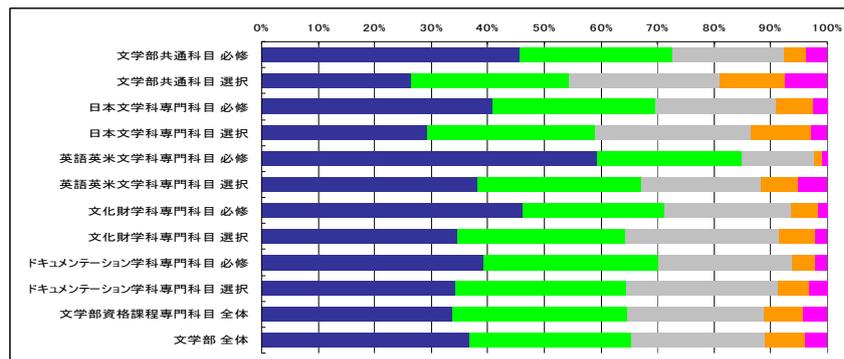
[設問13] この授業の受講者数は適切でしたか？



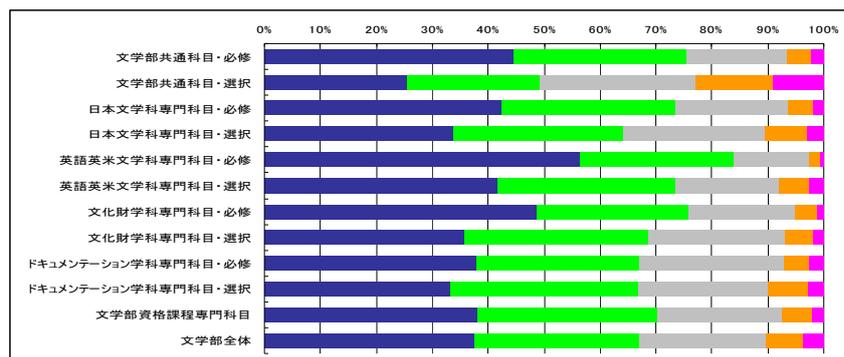
平成 19 年度



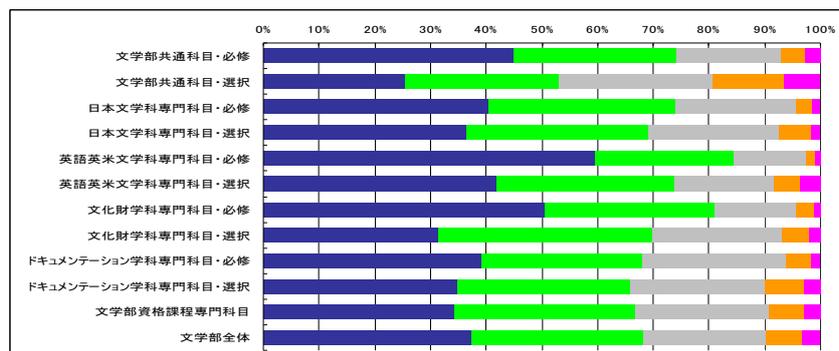
平成 20 年度



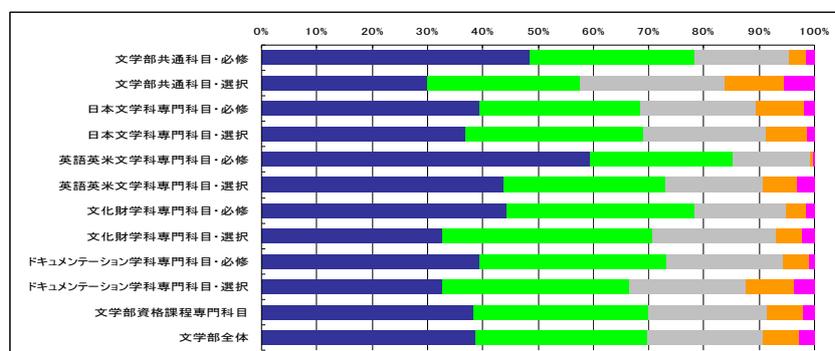
平成 21 年度



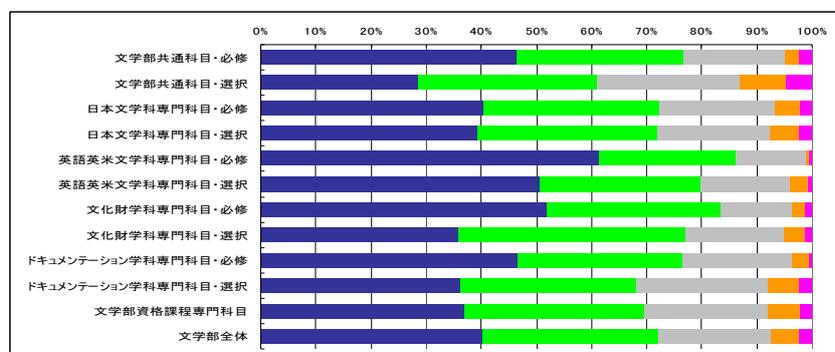
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



文学部全体を経年の見ると、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせた回答が 62%から 72%へと 10%程度増加しているのので、少しずつ改善されていることが分かる。

また、専門科目の方が必修科目に比べて、5%程度数値が低くなる傾向があるが、専門科目の方がより学生自身の興味に合致するためであろう。

受講者数が適切だと考えられていない教科は、文学部共通の選択科目である。「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせた回答が平成 24 年度で 61%であり、もっとも低い。このことは、学生がクラス当たりの人数が多すぎると考えていると思われるので、改善が必要であろう。

Ⅱ. 調査結果を受けて

— 各科および共通科目・資格課程 —

【日本文学科】

前回に行われた調査結果と比べ、学習意欲と授業に対する満足度が大きく上昇している。これは、教員の話し方・説明の仕方の評価や、内容に対する興味が高まっていることから判断して、受講者に合わせて教授方法や授業内容の改善を行ってきた教員の努力が実を結んだものと考えられる。一方、前回から課題となっている授業内容の理解度と授業外学習の時間量に関しては、改善の傾向はみられるものの、依然として低い状態に留まっており、特に授業外学習については、予習・復習をしていると応えた割合が半数以下である。積極的な学習を促して理解度を高めるには、受講者と教員が十分にコミュニケーションを取ることのできる環境を整え、双方向型の授業を心がける必要がある。

また今回の調査では、必修科目より選択科目の方が、授業に対する興味や満足度が相対的に高い傾向にあった。シラバスの内容によって履修を決定する受講者の割合が増加していることから、選択の自由を広げた成果であると考えられる。受講者数についても大幅に改善され、七割が適切と感じているという結果となった。しかし一方で、選択科目に比べて必修科目における理解度が低いことは、基礎的な学力不足を反映した結果でもある。大学教育としての水準を保ちつつ、受講者の学習意欲と満足度をさらに高めていくために、入学前教育やリメディアル教育の実施が求められよう。

【英語英米文学科】

英語英米文学科における授業評価アンケートの調査結果を平成 19 年度から 24 年度の 6 年間にわたって概観してみると、総じて好ましい方向に伸びている。5 段階評価のうち上位 2 段階にあたる「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の観点で伸びが見られる項目を以下に挙げてみたい。5%以内の伸びを示しているのは、必修科目における「質問や意見の言いやすい授業である」という評価や、選択科目で 5 回以上の欠席をする学生が減少していること、の 2 項目である。さらに、必修科目に関し、ほぼ全ての項目について 5%以上 10%以内の伸びが見られたことは評価すべきであろう。加えて、10%以上 20%以内の大きな伸びを示しているのは、多くの選択科目に関する項目である。例えば、学生自身の活動としての「意欲的に参加した」、「予習・復習など授業外の学習をしている」や、授業内容に対して「理解できた」、「満足である」、「興味を持った」などであった。また教員に対しては「質問や意見の言いやすい授業である」「板書や資料の示し方が適切である」「授業の進行速度や内容の分量が適切である」といったものが挙げられる。元々、必修科目に比較して選択科目の方が伸びしろを持っていたこともあると思われるが、やはり多くの項目においてより肯定的に評価されたことは、この 6 年間における努力の賜であると思われる。

一方、改善の余地があるのは、前回の授業評価アンケート報告書でも指摘されていた欠席率の高さである。これは、他学科と比較しても明らかに高い。選択科目では数パーセント改善したものの、必修科目での欠席 5 回以上の割合に改善は見られていない。今後は特に、必修科目で欠席率の高い学生へのサポートが必要かと思われる。

【文化財学科】

授業の出席状況は、前回の調査結果では「必修科目の出席率と選択科目の出席率の落差が目立つことが気になる」と指摘したが、年を逐う毎に差は縮まっており、24年度では、欠席が2回までの学生は、必修・選択とも80%を超えている。「あなたはこの授業に対して意欲的に参加しましたか」の質問に対して、必修科目を履修している85%の学生が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えており、高い数値を示している。これは入学時の学生の希望と、入学後の授業内容・指導の方向性が合致していると見て良いであろう。それを示すように、「あなたは授業内容に満足しましたか」、「あなたは授業内容に興味を持ちましたか」の質問に対しても、必修科目において「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が85%、あるいは85%に迫る数値である。必修科目は実習授業が中心になっているが、その内容・教授方法に関して、さらに学生の希望に応えられるよう努力して行きたい。「教員に授業に対する熱意が感じられましたか」の質問に対しては、必修・選択科目共、履修者の90%が「そう思う・どちらかと言えばそう思う」と回答しており、高い数値を示している。19年度が80%程であったので、改善が進んでいる。一方、「あなたはこの授業に対して予習・復習など授業外の学習をしましたか」の質問に対して、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた割合が選択科目において33%と低い。必修の場合ならば、実習が多いため少ない数値にもなるが、選択科目において授業外学習率が低いのは今後改善が必要であろう。「教員の話し方・説明の仕方は適切でしたか」、「教員の板書や資料の示し方は適切でしたか」の質問に対しては学科平均よりも高く、また、年を逐う毎に良くなっており、相対的に教育方法が向上していると思われるが、まだまだ改善の余地はあろう。

【ドキュメンテーション学科】

新学科設立後、平成19年度に完成年度を迎え、当学科4学年併せた評価が出来るようになった。前回の報告書（平成16-18年度のデータ）に比べ、多くの点で評価が高くなっている。しかし、全学年の学生が揃ったのは平成19年度からであり、無条件に前回の報告書の結果と比較することは適切ではない。平成19年度以降、必修科目・選択科目どちらにおいても、年々、満足度が向上していることは評価に値するであろう。文学部全体の平均から見ても評価が高い位置にいる。前回の報告書での指摘されている視点において、その後の6年間を通した評価結果について述べる。

前回の報告書において「1年生の専門科目」とあるが、これらの多くは当学科の必修科目である。その点において平成19年度から24年度にかけて、「教員の話し方」、「板書や資料の提示法」、「授業の進行速度」、「質問のしやすさ」それぞれの質問項目において、5-10%程度の向上が見られる。続けているFD活動が徐々に浸透し、その効果が表れている。しかし、選択科目においては、目に見える向上は無い。これらの結果で、教員が満足して良い訳でなく、良いところは維持し、改善できる点においては工夫をしていく必要があるだろう。

学科全体を通して、「質問のしやすさ」、「理解度」、「満足度」、「興味」についてだが、後者の3項目では、60%から70%に向けて徐々に伸びる傾向が見て取れる。必修科目に比べ、選択科目の方が、5-10%程度高く、学年進歩とともに自分の興味に合わせて選んだ科目を勉強することに拠る理解・満足・興味それぞれの質問項目における数値の伸びにつながった物と考える。こういった努力の結果、当学科で学び、専門科目を修めてきた学生の中において、平成26年度入学予定で、当学科卒、初の大学院生が生まれることになった。こういった意欲を持った学生が今後も生まれるよう、授業内容や方法、教室設備の改善が引き続き必要であろう。

【共通科目】

「授業への意欲的な参加」では、ある程度意欲的に参加した学生が 7 割程度であり、学科専門科目に比べて特に意欲が低い訳ではない。選択科目よりも必修科目の方がより意欲的に参加したとする割合が高く、必修科目では「予習・復習など授業外の学習」を実施したと回答した割合が選択科目よりも高かった。「教員の熱意」については、必修科目でも選択科目でも 8 割 5 分程度がある程度感じると回答しており、学科専門科目に比べて遜色はない。「教員の熱意が感じられたか」の問いに対して「そう思う」と回答した割合は、必修科目では平成 19 年度は 4 割程度だったが、徐々にその割合は高まり、平成 24 年に 5 割程度に達している。一方、選択科目ではあまり変化がみられなかった。「質問や意見の言いやすさ」「話し方・説明の仕方」「板書・資料の提示法」「進行速度・内容・分量」などでも同様に平成 24 年にかけて徐々に評価が高くなっており、その傾向は必修科目で、より顕著であった。また「理解度」「満足度」「興味度」も、平成 19 年から 24 年にかけて、徐々に高くなってきている。これらは、各教員の授業改善の試みの成果とみることができるのではないかと。専任教員が担当する場合が多い必修科目では、よりその傾向が強くあらわれているが、選択科目も含め、より一層の授業改善の努力を進めることが今後も重要である。他方、「受講者数」については、選択科目で「適切でない」と回答した割合が高くなっているが、その割合は、平成 21 年度をピークにして減少している。これは平成 23 年度から履修者数が 200 名を超える可能性のある選択科目の増コマを実施してきた成果と考えられる。どうしても受講者数が多くなりがちな選択科目で受講者数の適正化を図ることは、今後も重要な課題である。

【資格課程】

本学の資格課程は、教職課程、司書課程、司書教諭課程、学芸員課程に関しての科目からなる。現在この資格を生かして就職するには、それぞれの事情の違いはあるが、正規職員としての採用が難しい状況にある。それでも、こうした資格を取りたいという意欲のある学生が講義に出席しているにもかかわらず、いくつかの問題点がある。その中から問題点をいくつかあげてみる。「予習・復習などの授業外の学習」であるが、ここ三年の中では少しポイントがあがってきたとはいえ、「そう思う・どちらかといえばそう思う」という学生が 50%に満たない。卒業に必要な単位ではないこともあり、自主的に学習に取り組む状況になっていない。また、「授業内容の理解」については、「そう思う・どちらかといえばそう思う」という学生が 70%を少し越えたくらいであり、資格をきちんと生かせるとは十分とは言えない状況にある。

「教員の授業に対する熱意」「教員の話し方・説明の仕方」「授業の進行速度や内容の分量」については、文学部全体の平均より低くなっている。教員の側も個々の授業アンケートをもとに授業方法について考えていく必要がある。

なお、ここでの結果は、四つの資格課程を総括したもので、これだけで適切な考察をすることは難しい。しかし、何らかの具体的な授業改善を図る努力は行っていきたい。

Ⅲ. 設問一覽

授業評価アンケート

このアンケートは、学生自身の授業態度の自己評価と教員の授業方法の改善に役立つためのものです。

アンケートのすべての設問について、感じたままを回答してください。

※記入・マークの注意

- 記入・マークは黒鉛筆を使用してください。訂正する場合は、消しゴムで完全に消してください。
- アンケート実施日、科目名、担当教員名を必ず記入してください。

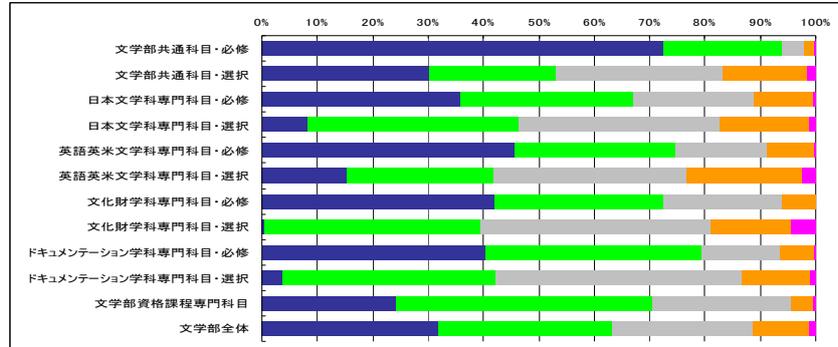
アンケート実施年月日	平成 年 月 日 ()			
科目名	担当教員名			

回答

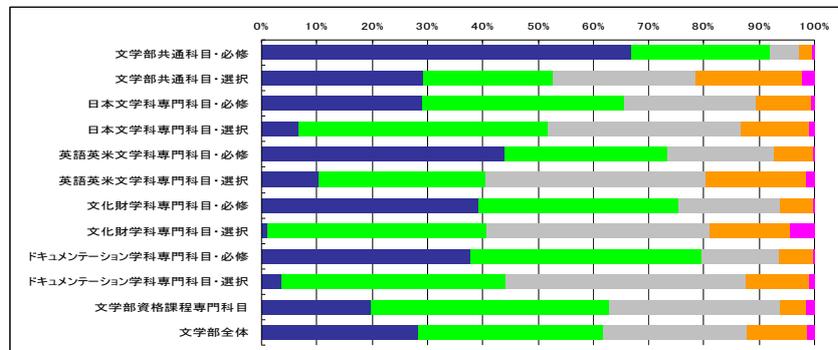
- a. そう思う。
- b. どちらかと言えばそう思う。
- c. どちらとも言えない。
- d. あまりそう思わない。
- e. そう思わない。

質 問	マ	ー	ク	欄
1. あなたがこの授業を履修した一番の理由は何ですか？ <small>a. 必修・必修選択科目、資格必修科目だから b. 時間割の都合 c. シラバスを見て授業内容に興味を持ったから d. 先輩・友人に勧められたから e. 単位が取り易そうだったから</small>	a	b	c	d e
2. あなたはこの授業をどの程度欠席しましたか？ <small>(a. 0回 b. 1～2回 c. 3～4回 d. 5～6回 e. 7回以上)</small>	a	b	c	d e
3. あなたはこの授業に対して意欲的に参加しましたか？	a	b	c	d e
4. あなたはこの授業に対して予習・復習など授業外の学習をしましたか？	a	b	c	d e
5. 教員に授業に対する熱意が感じられましたか？	a	b	c	d e
6. 教員の話し方・説明の仕方は適切でしたか？	a	b	c	d e
7. 教員の板書や資料の示し方は適切でしたか？	a	b	c	d e
8. この授業の進行速度や内容の分量は適切でしたか？	a	b	c	d e
9. 質問や意見が言いやすい授業でしたか？	a	b	c	d e
10. あなたは授業内容を理解できましたか？	a	b	c	d e
11. あなたは授業内容に満足しましたか？	a	b	c	d e
12. あなたは授業内容に興味を持ってましたか？	a	b	c	d e
13. この授業の受講者数は適切でしたか？	a	b	c	d e
14. あなたの学年は？ <small>(a. 1年 b. 2年 c. 3年 d. 4年 e. その他 (科目等履修生 単位互換履修生))</small>	a	b	c	d e
15.	a	b	c	d e
16.	a	b	c	d e
17.	a	b	c	d e
18. この授業に対する要望・感想などがありましたら、自由に書いてください。				

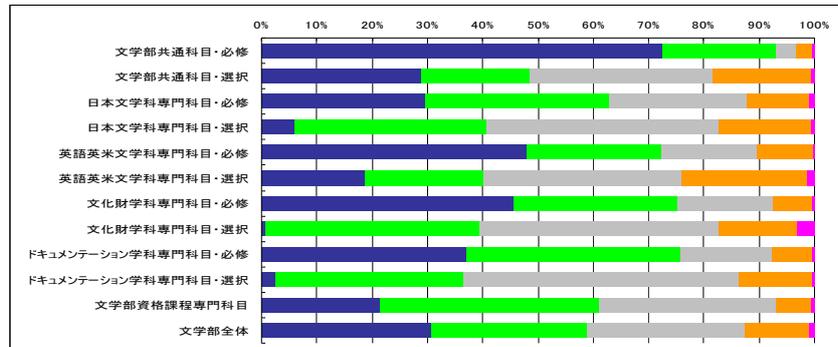
平成 22 年度



平成 23 年度



平成 24 年度



IV. まとめ

以上が平成 19 年度より 24 年度にわたる 6 年間の授業評価アンケートのデータと分析である。データから、学生の意識や教育の内容に関して経年変化による一定の方向を読み取ることが可能である。

今回の体裁は前回の「鶴見大学文学部授業評価アンケート報告書—平成 16・17・18 年度調査結果—」に準じた。前回の報告書には、今後の問題点として「共通科目の必修・選択、各科毎の必修・選択、資格課程科目全体、文学部全体とグループ分けを行って提示したが、その他の方法は考えられないか、あるいは、数値を示さず帯グラフのみの提示を行ったことに対して、今後の議論を待ちたい」と記している。このことは考慮すべきであると思うが、前回の報告書との比較考察のしやすさ、また、よりよい方法が現時点で見つからないこともあり、今回は前回のデータ処理、公表の仕方を踏襲した。

また、設問自体に対する課題もあったが、これも次の三点の異同のみとなった。第一に、「授業の成果・あなたは授業を受けた成果がありましたか」の設問が削除された。第二に、「5-1 履修理由 [設問 1] あなたがこの授業を履修した一番の理由は何ですか」と「5-2 受講者数 [設問 13] この授業の受講者数は適切でしたか」の二つの質問がプラスされた。第三に、「履修学年 [設問 14] あなたの学年は」は、年次進行にともなう意識変化や推移に関するデータが示されるものの煩雑になるため、報告書の分析からはずした。

各設問の分析はそちらに譲るが、総合的にみれば、学生の熱意や、教員の教授方法に対する数値は前回の結果より良い評価であると感じる。教員の教授方法が向上しているといつて良いと思われる。

最後に、各学科ならびに、共通教育、資格課程の先生方には本アンケート作成にあたり大変なご協力をいただいた。感謝申し上げます。今回の報告書が、今後の個々の授業及び学部全体の教育のあり方、方法の改善に役立つものとなり、本学における学生の教育の充実に寄与することを祈念して報告書のまとめとしたい。

文学部 FD 委員会

鶴見大学文学部授業評価アンケート報告書
平成 19～24 年度調査結果

平成 26 年 3 月

発行者 鶴見大学文学部長 高田信敬
編集 鶴見大学文学部 F D 委員会

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3